

石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動—ガンディー主義と「つながりの政治」』（京都：昭和堂、2011年、240頁、本体4,000円＋税、ISBN978-4-8122-1075-8）

（評）間 永次郎*

独立後インドに発生したガンディー主義者による社会運動を、いかに評価するのかについては、研究者の間で意見の一致を見ない。国際的にも注目を浴びたヴィノーバー・バーヴェーのブーダーン運動やジャヤプラカーシュ・ナーラーヤンの全面改革運動は言うに及ばず、運動の指導者的存在を失った1970年代後半以降のガンディー主義的環境運動や反核運動に関しては特にそうである。後者をインドのガンディー主義者が持つ社会的影響力の衰退と見るのか、或いは、ロベルト・ミヒェルスの「寡頭制の鉄則」のようなある種の社会運動に必然的に伴う上意下達組織化の解体として肯定的に捉えるかは見解の分かれるところであろう。こうしたガンディー主義運動の評価が問われている昨今の現状に反して、管見の限り、これまで特定のガンディー主義者の思想と実践を、一冊の本として包括的に論じた学術書は皆無であった。

本書は、著者が2008年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した博士論文に加筆修正が加わり出版されたものである。計15ヶ月に亘る現地調査において収集されたインタビュー記録や、未出版の一次文献史料を土台に、従来のガンディー主義研究を乗り越えるべく著者独自の挑戦的見解が提示されている。著者が本書において、主題として取り上げているのは、先行研究で、ほとんど踏み込んだ議論がなされてこなかったガンディー主義者スダルラール・バフグナー（1927- ）という人物である。北インド・ウッタラーカンド地方で展開された二つの環境

* 一橋大学大学院社会学研究科博士課程

・ 2013、「M・K・ガンディーにおけるナショナリズムと性—晩年『ブラフマチャルヤの実験』再考」、『アジア研究』、第58巻4号、37-49頁。
・ 2011、「M・K・ガンディー政治的 ahimsā の起源—“Hind Swarājya” (1909) から ahimsāvrat (1915) まで」、『南アジア研究』、第23号、7-30頁。

運動、「チブコー運動（1973-81）」と「テーリー・ダム反対運動（1973-2006）」を事例に、バフグナーの果たした役割が、多様な運動参加主体との複雑なネットワーク関係の中から考察されている。本書最大の特徴は、これらの議論が、ガンディー研究内部の評価を巡るものとして終始するのではなく、社会運動論や環境研究といった幅広い理論的枠組みの中から探究されていることである。以下、終章を除く全体の議論を概観し、些少ながら評言を加えたい。

序章では、本書における問題の所在が提示されている。まず、著者は、従来の環境研究におけるバフグナー理解の諸々の問題点と、それらが生じた方法論的原因を指摘する。著者によれば、先行研究では、R・グーハラの「貧しい人々の環境主義（the environmentalism of the poor, 以下、EOP）」の理論にならない、バフグナーの環境運動における参加主体が安易に「貧しい人々」という特定の主体階層に還元して考察されてきたため、実際のバフグナーの運動によって醸成されていた多層的な運動主体の複雑なネットワークや非暴力的戦術による他者・自己変容の過程の中で構築された「つながりの政治（connected politics）」という側面が見落とされてきたという。そして、著者は、このようなバフグナーの運動において、政治家・活動家・メディア報道家・民衆などの多層的参加主体による人的「つながり」があったことを明らかにし、それを可能とした彼の思想と非暴力的戦術とを、社会運動論の観点から探究するものとして、本書を位置付ける。

次に第一章では、「ガンディー主義者」と「ガンディー主義」が、緩やかに定義付けられた後、元来、「自然」が明示的に含まれていなかった独立運動期におけるガンディー主義の思想が、独立後のガンディー主義者たちの実践の中で、いかに「環境思想」へと発展していったかが論究されている。

第二章では、バフグナーが運動を展開したウッターカンド地方における社会的概況が説明された後、同地方で、社会運動を先駆的に行った二人のガンディー主義者ミラー・ベーン（1892-1982）とサララー・ベーン（1901-82）という人物の思想と活動に光が当てられる。特に、ミラーに至っては、ウッターカンド地方のヒマラヤ地域の環境問題に関心を抱いた先駆的人物であり、彼女の森林保護の主張は、後のバフグナーに甚大な影響をもたらしたという。

第三章では、バフグナー自身の活動史とそれを支えていた実践哲学について議論が進む。まず、バフグナーが最初にガンディー主義者として地元住民の生活向上のために草の根の活動を行っていく過程で、森林保護を主張するに至った経緯が明かされる。次に、彼が運動に参加する中、洋の東西を問わず、多様な思想家の著作を渉猟する過程で、彼独自の「自然の昇華」という哲学が構築されていったことが述べられている。それは、バフグナー自身の言葉を借りれば、「自然（プラクリティ）」を「文化的な状態（サンスクリティ）」へと「昇華」させる実践哲学であり、著者は、この哲学が、バフグナーの運動において、「他者への関わり方を変えることによって他者を変え、またそれによってさらに自己も変わる、という相互変容」をもたらした（91-92頁）、多層的ネットワークの構築を可能にする思想的基盤を提供したと指摘する。

第四章では、ヒマラヤ地方の森林地帯で、民間会社による森林伐採を阻止するために行われた「チプコー（「抱きつけ」の意；村人が木に抱きついたことから）運動」と、その運動においてバフグナーが果たした役割について検討される。著者が特に着目するのは、バフグナーの指導のもと、多様な参加主体が運動に加わっていく中で、村人たちの間に、環境保護に対する認識の変化が起こったことである。つまり、運動が開始された当初、村人たちの環境保護の目的は、森林伐採の権利の獲得といった自己利害にあったのに対し、徐々に運動が活性化されていくにつれ、その目的が「自然の恵み」を守るという生命への配慮へと変化していったという。著者は、ここに、バフグナーの昇華の哲学によって喚起された運動参加主体における「自己変容」の契機を見る。

第五章では、ウッタラーカンド地方東部、ガンガー川上流域にあるテーリー市において展開された「テーリー・ダム反対運動」におけるバフグナーの役割について考察されている。テーリー・ダムは、1978年に建設計画が着工され、80年代以降に、反対運動組織が結成された。著者はこの反対運動の中でも、92年5月15日のデモ集会において提案された「ヒマラヤを救え運動」宣言を取り上げる。この宣言以降、著者は、ダム反対運動は、自己利害を超えた「ヒマラヤを救う」という価値を運動の基盤に据えることで、自らの生き方を問い直す自己反省的抗議運動へと発展したと指摘する。

第六章では、これまで見てきた二つの環境運動において、何故、バフグナーが、多様な運動主体を取り込むことに成功し、これらの主体を非暴力的に「つなげる」人物としての役割を果たすことが可能であったのかということが、運動で使用された「行脚」と「断食」という二つの身体実践との関係から明かされる。「行脚」には、「地域の生態条件に適した持続的な自然資源運営を図ることをめざし、またそれに即した公正な社会のあり方と、ひとりひとりのよりよい生活スタイルをめざす『昇華』の思想が、隠されて」おり（187頁）、「断食」には、「自己と神との関係の昇華を」可能にする実践哲学があると説く（193-194頁）。著者は、このような行脚や断食の実践には、運動における支配的な「リーダー」ではなく、「みずから創造的苦痛をえらびとり、その苦痛をわが身にひきうける」「キーパーソン」としての振る舞いが示されており（34-35頁）、そのことが、上意下達の官僚的運動組織ではなく、インド全国規模の「横のつながり」によって緩やかに結束された非暴力的環境運動を醸成することを可能にしたと結論する（200-201頁）。

以上が、序章から第六章までの大まかな内容である。評者が考える本書における主要な貢献は、バフグナーのインタビュー史料を含む運動参加者の生の声を用いて、彼が運動で果たした役割をめぐるさまざまな先行研究の見解を整理し、問い直した点にある。それらは、以下の三点にまとめられる。すなわち、著者は、第一に、バフグナーの環境運動が多層的な人的ネットワークを構築していたこと、第二に、彼がきわめてプラグマティックな森林保護論を、現地の人々との実際の交流や調査に基づいて唱えていたこと、第三に、運動者における参加の動機や目的が固定的なものではなく、運動が展開されていく過程で発展し変容するものであったことを明らかにした。

しかしながら、このような議論が展開されるにあたって、評者は以下のような二つの疑問も抱いた。第一に、評者には、著者が序章で自らの立場を設定する際に引用した R・グーハラの EOP 論と、それが提唱される以前の [Gadgil 1992: Ch. 4] などに示されるナイーヴな前植民地期に関する環境史理解を混同しているように見えた。EOP 論における運動主体の還元主義の問題と、前植民地期の回顧主義的環境史理解とは異なる問題軸にある。また、グーハラは運動主体や戦略の多様性が存している可能性自体を決して排除していない [Guha 1997: 5, 9, 11–15]。

第二に、本書では、序章で挙げられているバフグナーの運動とヒンドゥー右派の保守政治との結び付きを指摘した先行研究に対する著者の見解がほとんど述べられていない (23–25 頁)。もし、バフグナーの「つながりの政治」が、「非暴力原理を徹底させる」(34 頁)ものであるならば、宗教的少数派の排除といった構造的暴力の問題をはらむヒンドゥー右派の政治との相違を、思想的観点から明示する作業は必要不可欠ではないだろうか。昇華の哲学はややもすると、V・シヴァの新伝統主義の本質主義と類似しているようにも見えてしまう [Shiva 1988: Ch. 3]。

何れにせよ、これまで十分に知られていなかったバフグナーの環境運動・思想の内実が一冊の著作として広範に取り扱われた本書は、ガーンディー研究のみならず、インドの環境史理解一般にも少なからぬ意義を持つものであろうと思われる。

参考文献

- Gadgil, M., and R. Guha, 1992, *This Fissured Land: An Ecological History of India*, Delhi: Oxford University Press.
- Guha, R., and J. Martinez-Alier, 1997, *Varieties of Environmentalism: Essays North and South*, Delhi: Oxford University Press.
- Shiva, V., 1988, *Staying Alive: Women, Ecology and Survival in India*, New Delhi: Kali for Women.